ディアコニア

293

説教

招きとしての神の愛

牧師　佐藤千郎

昼の一二時になると、全地が暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、「待て、エリヤが彼を下ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、**イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。**（マルコによる福音書十五章三十三～三十九節）

キリスト者にとっての教養とは、「違いを認め、和解を通して、違いを豊かさへと高める力である。」と考えています。更に、その力は、主イエス・キリストの愛に裏打ちされることなしには、具体的には、隣人の貧しさや弱さの傍らに身を置き、寄り添うことなしには、発揮されることのない力であると思っています。

今から二千年前のユダヤでは、「隣人を愛し、敵を憎む」ことが、ユダヤ人社会で暮らす人たちの「教養」でした。「隣人を愛しなさい」という言葉に込められた神の真意が、信仰生活を重んじる人たちの暮らしの中で歪められ、自分たちに都合のよい言葉に変えられていったのです。

「しかしわたしは言っておく、敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」とイエスがお語りになったとき、隣人（仲間）を愛することが、油断をすると、敵を作り、さらに敵への憎しみを増すことによって、仲間の絆を強くしていくことの恐ろしさを、厳しく指摘されたのです。

この恐ろしさは他人事ではありません。形を変えて、現在の日本にも蔓延しつつあることを、N大アメフト事件はじめ、次々と明らかになる不祥事や著名な人たちの発言に感じざるを得ません。愛に宿る罪を軽んじてはいけません。

主イエスの死と復活の後誕生したキリスト教会で編集された文書が新約聖書です。この聖書で「ここに愛がある」と書かれている時の「ここ」とは、イエスの十字架です。

新約聖書には四つの福音書があり、それらの福音書全てで、十字架の出来事の顛末（テンマツ）に、多くの紙面が割かれており、ひとつ一つの場面や言葉に、イエス・キリストの愛を読み取ることが出来ます。今日はその中から、百人隊長のことばに注目し、彼の言葉から、主イエスが示す愛の姿に近づきたいと思います。

百人隊長とはエルサレムに駐屯していたローマ軍の階級で、ローマ軍兵士百人を部下に持つ指揮官です。軍の主たる任務が、エルサレム住民の反ローマの動きに目を光らせることだったことを考えると、彼は、常に貧しく弱い立場の民衆と共に在ったイエスがどんな人物であった

かを、誰よりもよく知っており、イエスが危険な人物でないかどうか常に分析していた人間であったと思われます。

加えて、もし、囚人イエスを無罪放免した場合、ユダヤ人の中に必ず生じる反感への恐怖から、イエスに死刑の判決を下したローマの総督ピラトは、判決の過程の中で、イエスは無罪だったと告白していることから、上司である総督に、イエスの動向について詳しく報告していたはずの百人隊長もまた、イエスの無罪を確信していたと考えるのが自然です。

ところが、こともあろうに、百人隊長がイエスの処刑現場の責任者を命じられたのです。心中穏やかでなかったであろう彼の苦渋には、一人の人間として、察して余りあるものがあります。

時に、人には職責上、事の不条理を承知で職務を遂行していかざるをえない現実があります。死刑執行の責任者となった百人隊長に、同情の念とこころの痛みを感じざるを得ません。

さて、イエス処刑の日の驚くべき景色を福音書は伝えています。

イエスの日常から十字架の死までの一部始終を見て来た百人隊長が、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と叫んで息を引き取られたイエスを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言ったのです。それは、「この人こそ、本当に、私の気持ちを分って下さるお方、わたしを救って下さるお方です」と言う、こころからの告白に他なりません。

主イエスの十字架上のこの叫びは、イエスのもとに集まった救いを求める人たちの、魂の奥からの叫びであり訴えでもあることを知っていた百人隊長は、不当な死を強いられる中にあってもなお最後まで、救いを求める貧しく弱い民衆の叫びと共に在る主イエス・キリストのお姿の中に、神の臨在と、神の子イエスを十字架に架けた張本人でもある自分にも注がれている神の愛を読み取ったのでした。まさに、奇跡が現実となった瞬間でした。

この景色には、十字架刑執行の当事者であり、(神の子)イエスの直接の加害者とも言える百人隊長に起こった奇跡によって明らかにされた真実があります。それが、罪に満ちた世界からも決して失われることのない「神の愛」です。そして、神の愛は「わたしは、あなたと共にいる」との約束と共に届けられます。

神様からのこの約束は、「何故、わたしをお見捨てになったのですか」という叫びを生むほどの貧しさや弱さの中でも、失われることはありません。

むしろ、隣人が背負い込んだ貧しさや弱さを通して、神様がこの世に届けてくださる祝福があります。その祝福こそ、彼らの貧しさ、弱さの傍らにあって、キリストの愛に支えられつつ共に歩む人たちの、その歩みの中で明らかにされていく喜びであり、感謝であると言えましょう。

社会事業に従事するわたしたちの働きは、この喜び、この感謝への招きに他なりません。

(九月二八～二九日開催の日本キリスト教社会事業同盟研修会・開会礼拝説教に手を加えたものです)

キリストの愛をはこんだ人々3

エーヴァ・フォン・ティーレヴィンクラー

エーヴァ・フォン・ティーレ＝ヴィンクラー（Eva von Thiele Winckler）は、ティーレヴィンクラー男爵の第8子として生まれました。ポーランドに近いミーヒョヴィッツ城（Miechowitz）で、なんの心配もなく少女時代を過ごした13歳の彼女に、母の死は、深い悲しみをもたらしました。未知なものへの深い憧れは、キリストが彼女の中に現われ給うたとき、はじめて鎮まりました。

エーヴァが16歳のとき、ヨハネ10章27、28節の「わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う。我かれらに永遠の命を与うれば彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらをわが手より奪う者あらじ。」を見出しました。マタイ10章37節にある「我よりも父または母を愛するものは我に相応しからず」も拒みえぬものでした。彼女はただ「お役に立たせてください」と祈らざるをえませんでした。そのとき彼女のうちに、貧しいもの、助けを要するものへの大きな愛が目覚めたのです。

そのときから、彼女は愛の道をつきすすみました。父が娘の計画にたいして「否」と云ったときにも、神の不可能を可能になし給うことを確信し、ついに看護法を習得し、のちにはディアコニッセにさえなったのであります。

ベーテルの母の家でディアコニッセの中にあるとき、彼女はどんなに幸福だったでしょう！ 8カ月後再び家に帰り、病人や老人の孤独な人々の訪問を始め、また少女たちのために裁縫学校を開きました。24歳のとき、父は娘の仕事のためにフリーデンスホルト（平和の城）とよばれた家を建てさせました。その落成式以来、彼女は「ムッター（母）」という称号をもってよばれました。愛に飢え、また困窮して彼女のもとへ来るひとびとすべてに、心も家もひろく解放されました。初めの日に刑に服した一組の夫婦が二人の子供を連れて、それに続いて不具の小女が、さらにまったく頼辺のない老婆が……。寝台と揺籃は5台から40台になりました。しかし、ムッター・エーヴァは、救いを乞うて来る何人にも「駄目です」という理由を知りませんでした。

学校の放課後には、毎日100人以上の児童が押しかけ、村の病人たちは立ち去ろうとせず、そのうえ資金は乏しく、如何に若い「母」のこころが広くとも、この課題は重すぎるものでした。そこへベーテルからボールデルシュヴィンク牧師が訪ねてき、小さな姉妹団をつくることをすすめ、ムッター・エーヴァはベーテルへ行き、ディアコニッセの祝福式をうけました。

二年の後、病人と老人と子供のための家が開設され、フリーデンスホルト最初の着衣式が行われました。彼女のこころは大きなためらいでいっぱいでした。そして次のような規則をつくりました。

「救主への心からなる献身、世の宝いっさいの放棄、神の婢女としての完き服従」

彼女が思い病気から回復したとき、ボールデルシュヴィンク牧師は彼女にベーテルの奉仕女長になることを求めました。愛するフリーデンスホルトを去ることは苦しいことでした。しかし、この神の命令のまえに深い謙虚と誠実をもって5年間、ベーテルの大きなディアコニー管理者として奉仕しました。そこで彼女は、健康を失い、医師は回復を諦めさえいたしました。

数か月の後、彼女が再び健康になることを許されたとき、彼女はベーテルでの職務を辞し、愛するフリーデンスホルトの近くに、小さな家を建てて住みました。

ムッター・エーヴァの努力は、キリスト教徒としての生活の聖化にありました。彼女はイギリスに行き、そこで覚醒運動の影響をうけました。これが姉妹たちの発展に助けとなり、その数は年々に増え、戦争の間（1914～1918）には、その数は400にのぼり、のちには700になりました。

ムッター・エーヴァは、裕福な家庭に育ち、25回目の誕生日に母の遺産を受けましたが、自分の財産を1ペニヒも余さず神の御用に献げました。貧しいひとびとが生活している限り、彼女はその下におりました。ゆえに神は彼女に多額のものをお任せになりました。こうして、素晴らしいほど大きな祈りを聞いてもらったのであります。

ムッター・エーヴァは、謙虚な人でありました。或る大きな会議の席で彼女は何か話をするように求められました。

「私と私の生涯にとって、この地上のものは何ものでもありません。キリストが私に与え給うたものだけが、愛に値するのです。」これが、彼女の語ったすべてでありました。

外国伝道への招きも聞き逃すことは出来ませんでした。フリーデンスホルトのディアコニッセたちはシナ、ラプランド、ポーランドなどへ行きました。彼女の数多い旅は、愛の旅でありました。孤独な、希望を失った囚人たちを訪れ、多くの人々の霊魂の医者となりました。彼女の聖書の説明と手紙とによって、どれだけ多くの人々を神の恵みへともたらしたことでしょう！

1930年6月21日の日曜日、彼女は息を引き取りました。「すべては恵です。私はその幸福な恵の児にすぎません。」

これが、最後の日の告白でありました。彼女がかいた有名な詩「主の婢女」の結びの言葉は、いまも深い意味をもっています。

「たとえ手は憩うことがあっても、主は私をお放しになりません。私は主に、とこしえにお仕えするのです。主のはしため！」

（エリザベト・フォリンガー　1954年10月）

いずみ寮60周年に感謝して

横田　千代子
（いずみ寮施設長）

和やかな会場の主役は花たち

２０１８年９月22日の午後、いずみ寮60周年記念式典を行いました。

その日の午前中には、「ベテスダの日」が同じ会場で開かれ、懐かしい祈りの友の方々のお顔がいずみ寮に集まり、和やかな集いがもたれました。ご高齢により参加することが難しくなられたシュベスターもおられましたが、ご参加頂いたどの方のお顔も笑顔に溢れておりました。1年に一度の祝福された時間でした。

会場はいずみ寮の作業場「ＣＯＣＯアートいずみ」。今年はその会場を、秋のススキの野原のように仕立て、コスモスの花をいっぱいに咲かせてみました。親しくさせて頂いている花屋さんにデザインして頂きました。

そのお蔭でしょうか、和やかな中にそよ風が吹き、花たちのささやきが聞こえるような舞台が出来ました。心も安らぎ感謝でいっぱいでした。

時の流れを振り返って

私がいずみ寮と出会い、いずみ寮で職員として採用され、施設長の任を受けて、35年の時が流れています。私は歴代の施設長の方々には足元にも及びませんが、創設者・深津文雄先生、藤巻三郎先生、河野健児先生に育てていただきました。

幾度か心がくじけそうになることもありましたが、いずみ寮との出会いは私の人生の全てになりつつあります。多くの利用者との出会いは人生の宝です。支えて下さった職員の方々はかけがえのない仲間です。

今は、洗礼を授かり、神さまと共に歩めることが心の支え、大きな力になっています。もう少し…だけ、もう少しだけお時間を頂けるよう祈っています。

出会った女性たちの入所背景にこだわって

１９５６年（昭和31年）売春防止法が制定されて、今年で62年を迎えます。

いずみ寮は、その2年後、「売春防止法」を根拠法に、１９５８年（昭和33年）に「婦人保護施設」として設置され、今年で60年を迎えました。

戦後、10年を経て制定された「売春防止法」、その法律によっていずみ寮にたどり着いた女性たち。どのような生活環境で生き抜いてきたのか、とても気に

なっていました。そのこだわりは「いずみ寮設立当初の利用者と、現在の利用者と入所の背景にどのような違いがあるのだろうか」というこだわりでした。

２０１０年12月に〈売春防止法制定当時の入所者の状況〉を抜粋して一部まとめてみました。まず驚いたのは、１９５８年（昭和33年）に入所した女性たちの背景に見た生活状況です。それはあまりにも悲惨でした。さらに、そこからは、戦後10年の荒んだ社会の姿がまざまざと浮かび上がってきたのです。

戦争により居場所を失い、家族を失い、職業を失い、路頭に迷い、貧困社会の中に置かれながらも懸命に生き延びてきた女性たちの生活が垣間見られたのです。胸が熱くなりました。多くの方々に知的障害・精神の疾病があり、重ねて、その生活状況は貧困をベースに、貧農・生活難・売春・女中・子守り・窃盗などです。どれほど生きにくい社会であったか…逃げ出したいくらい辛い思いをされたことでしょう。それが当時、いずみ寮に辿り着いた女性たちの実態でした。

その女性たちが「婦人保護施設」に入所し、ともかく住む場所を与えられ、窃盗をせずに空腹を満たす食べものが保障されたという安心感は、大きいものがあったことと思います。この実態は戦後も今も全く変わっていません。

垣間見られた性被害の実態

また、まとめたささやかな記録の中には記すことが出来ていませんが、読み込んだケース記録の中には暴力、性暴力の蔓延がみられました。しかも加害者が実父であり、祖父であり兄であり、叔父でありという近親者が多かったのです。

当時は「性暴力の被害者」という視点は皆無に等しかったといえるでしょう。当然専門的なケアを受けることなど論外で、結果として「生きづらさ」は被害によるＰＴＳＤとは認識されず「わがまま」「身勝手」など個人の性格的問題として処理されてきた部分もあったかと推察されます。この状況も、戦後も今も全く変わっていないのです。

性被害のケアのために、婦人保護施設に専門職として「心理職」の配置がなされたのは、随分後になってのことです。

祝福と共にこの日を迎えて

この野原のような会場で開かれた「いずみ寮60周年記念式典」、忘れません。ご参加いただき祝辞を頂いた皆さま、そしてお忙しい中しかも遠方からもお出で下さった皆さま、忘れません。手話が盛り込まれたコーラスグループの皆さま、忘れません。演奏下さり、歌を歌って下さった先生たち、忘れません。豊かさは皆の上に注がれました。60年の時は風と共に、花々と共に、祝福と共に頭上に降り注がれました。

「ベテスダの日」と共に開催された「いずみ寮60周年記念式典」。これからのいずみ寮も皆様によって守られると信じます。行き場のない、居場所のない、貧困や暴力から逃れて辿り着く女性や子どもたちを見守って下さい。神さまの大きな御手の中にあってお守りください。

60年お支え下さったみなさま全てに感謝をこめて…。

いずみ寮創立60周年記念式典挨拶

神　備えたもう

奉仕女　天羽道子
（かにた婦人の村・名誉村長）

60周年おめでとうございます。

いずみ寮の皆さまに、まずお祝いを申し上げ、お集まりの皆さまと共に、この喜びの日をお与え下さいました神さまに、感謝を捧げます。創立当初より関わった者として、こうしてお祝いの席に連ならせていただき、本当に感謝にたえません。この60年を顧みて「神備えたもう」との思いを強くしております。今日は、私にしか申しあげることが出来ないようなことを、お話しさせていただきます。

1958年にいずみ寮が創立いたしましたが、いつ、誰によって志されたのか、8年前に遡って、いずみ寮の前史にふれさせていただこうかと思います。

1949年の秋のことです。深津文雄牧師がその当時牧会をしておられたのが、日本基督教団・上富坂教会でした。この教会はオストアジアミッションというドイツの教団によって設立された教会で、ドイツとの関わりが大変深くございます。

深津牧師は説教の中で、敗戦国ドイツでは、戦後の悲惨な状況の中で、ディアコニッセ（奉仕女）の方たちの働きが非常に大きかったことを話されました。戦後4年のことで、日本も大変悲惨な状況でした。私も、キリスト者女性として何かしなければならないと、常々心にかかっておりましたので、このお話を伺ったときに、いったいディアコニッセとはどういうものであるのか、そういうことはわかりませんでしたけれども、とにかく一週間のちの日曜日の礼拝の後、「私もディアコニッセにならせていただきたい」という申し出をいたしました。突然のことで、牧師としても、これは大変だとお思いになられたのではないかと思いますが、とにかくしばらく準備のときを――ということでした。

5年後の54年5月に、私の他に3名の志願者が備えられて、4名の制服をいただく着衣式を、埼玉県加須の愛泉教会でいたしました。ドイツから制服を着たディアコニッセの方がお二人、日本のため、愛泉寮（愛の泉の施設）を手伝うために来られていましたが、その方たちが、日本の志願者があるならば、私たちと一緒に生活を――ということで、「ベテスダ奉仕女母の家」が、加須の地の仮住まいで誕生いたしました。

ベテスダ奉仕女母の家誕生の2年後、56年5月に日本で**売春防止法が成立**いたしました。これは、遡って80年ほどの廃娼運動、殊にキリスト教婦人矯風会と、救世軍の方々の血のにじむような戦いを経て成立したものです。そのあとを継いで、**日本で生まれたばかりの奉仕女の業**として、この問題と取り組んでいきたいと願いました。そのことについてキリスト教婦人矯風会の久布白落実先生を深津牧師がお訪ねして、若い未熟な奉仕女でこのお仕事が出来るだろうかと、ご相談をいたしました時に、大変お励ましをいただき、婦人保護事業に取り組む決断の原動力となりました。

早速56年9月25日から1年4ヶ月、キリスト教婦人矯風会・慈愛寮で、一人の姉妹が実習をさせていただいて、準備を

始め、また、前年の57年2月に母の家建設予定地として、１０４１坪の土地を購入していたことも幸いし、「施設設立申請書」を東京都に提出することが出来たのでした。そのことも、「神備えたもう」ことのひとつだと思います。

57年12月には、「いずみ寮設立賛助会員の募集」がディアコニ誌22号に掲載され、500人以上の方たちのお申込をいただき、58年1月19日、赤松林の中で定礎式が行われました。オーバーを着て円くなって讃美歌を歌い、聖書の言葉をいただいて祈りを捧げました。本当に感慨無量、感動と感謝に満ちたことを懐かしく思い浮かべることができます。

それから3か月の突貫工事で、58年4月12日いずみ寮の開所にこぎつけました。ベテスダ奉仕女母の家の館長でいらした深津牧師が、いずみ寮の初代寮長となられ、50人の定員に対して、5人のシュヴェスターが各々、寮母、事務、作業、調理、医務の職に就き、医師として奈良林祥医師も加わって下さいました。

入所して来られた方たちの状況（知的障害あるいは精神障害）から、深津牧師が上富坂教会時代から画いていた「弱者を強者のふむに任せないで、弱者には弱者で生きられる世界をつくること」というコロニーの夢を語りはじめらました。「私たち弱い者同士、みんなで助け合ってなにか生産しながら生きていく、安心して生活できる場所がほしい」という声が上がりはじめ、開所2カ月後の6月6日に来訪された久布白落実先生に、一人の利用者がコロニー実現を訴えました。「先生はお顔が広いので、どうか国会議員さん達にもお話をいただき、多くの方々におすすめいただいて、コロニーを作って下さい」と。久布白先生は大変感動され、「何事も人頼みでできるものではない。そう思ったら今日自分で始めなさい。足元の第一歩から。私が今日種をまくから、これを育てなさい。」とおっしゃって、ご自分のがまぐちから出てきた52円を種として差し出してくださいました。

その言葉に励まされて、本当にその日から「小コロニー」としての仕事が始められました。鶏を飼ったり豚を飼ったり、洗濯作業（おむつサービス）が出来たり、パン工場が出来たり、農耕をしたり、ブロック作りや、廃品回収もいたしました。

その頃、東京神学大学や早稲田奉仕園の学生さん等、本当に多くの若者たちがいずみ寮のワークキャンプに集い「ディアコニア兄弟会」も発足し、カマボコ兵舎をもらってきて自分たちの拠点としたりして、積極的にいずみ寮の働きに関わって下さいました。非常に活気に満ちた時代であったかと思います。

そしてその洗濯工場で、61年4月30日に、石田友雄牧師によって大泉ベテル教会が誕生したのです。

「どんなに肉体的に破れはてた人でも、親切にお友達になってあげ、その人の中に残されている才能をひきだしてあげ、たとえ能力がなく、社会に戻ってゆくことの困難な人でも、末長く世話してあげることの出来るような愛に満ちた暖かい施設が必要である。」

――いずみ寮創立にあたって・深津 文雄

2018年 ベテスダの日のつどい

今年も9月22日土曜日にいずみ寮でベテスダの日のつどいが持たれ、4名の奉仕女、14名の祈りの友（奉仕女のかげに祈る十人）と、法人関係者、大泉ベテル教会の方など61名が集って、交わりのときを持つことができました。

開会礼拝の説教は、森史子牧師による「収穫のための働き手（マタイ9章）」。その中で「ベテスダの日」の起源について、ベテスダ創設初期には、ひとりひとりの奉仕女の誕生日に祈りの友が集っていたが、3年目から毎年9月23日を「ベテスダの日」と定めて、全員が集うことになったとのご紹介がありました。

今年はシュヴェスター道子とシュヴェスター歌子が、健康が優れず欠席されましたが、シュヴェスター歌子の祈りの友近江優子姉が来られ、美唄の教会での交わりについて話され、シュヴェスター道子には、新しい祈りの友が与えられたことは、本当に感謝です。

この日はいずみ寮創立60周年記念式典と重ねてベテスダの日を持ったため、お集まりいただいた方々全員のお声を聞く時間が取れなく、お名前のご紹介だけになってしまいましたが、テーブル毎に、いずみ寮の調理の方々の作って下さったサンドウィッチやゼリー、果物など、心のこもった昼食をいただきながら、ゆっくりと近況を伺うことができました。

年に一度のつどいですが、こうして集まって語り合うことで、自分たちがベテスダの歴史と精神に連なっている者だということを、改めて認識し、思いを新たにする良い時間になっています。

「ふるさと」を手話で歌う
いずみ寮「コールフォンテ」のみなさん

去る8月末の夕方、8月15日にNHKEテレで放映された「女性たちと生きて」を見たからと、スーツケース一つで、突然に一婦人が訪ねて来られました。

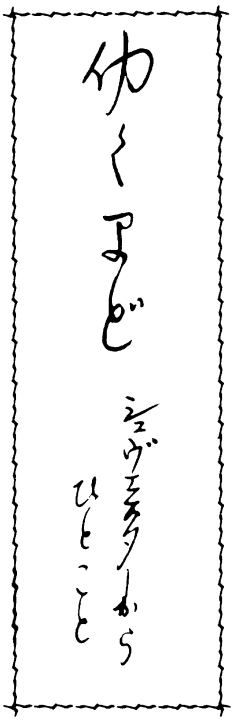
事情があって、居所不安定な方。とにかくその夜は管理棟2階の和室におとまりいただき、翌朝は村の食卓に。それからひと月、日曜日の礼拝にも参加され、大変気に入ったかにた村に心残しつつ、滞在中に探された新しい地に移られ、先日お礼状をいただきました。　天羽 道子

＊

ホームで8人の方たちと一緒の暮らし。三度のお食事と2回のおやつ時間にはホールに出て、新聞を見たり、テレビを見たりしています。お誕生日には手作りのケーキを作っていただき、季節の行事や外出してのお食事などは積極的に参加しています。

今は車椅子に乗ることとなり、リハビリをしていますが、遠出はむつかしく、ベテスダの日の参加は叶いませんでした。

（桜庭歌子姉の日常――天羽代筆）



秋空を見上げ、今日も恵みの中に生かされていることの感謝をささげます。

世の中には物が溢れ、満たされていることが当たり前の様にみえますが、陽の当たる所ばかりではなく、淋しい思いの人もいるということが寄りそってみてわかります。一人でも多く手助けできるように、祈りたいと思います。小川 都代

今夏は六月から厳しい暑さで、ようやく過ごしました。「ベテスダの日」に久しぶりに出席でき、祈りの友の方との交わりが持てて感謝しています。「主よ我ら立つ手に手をとりて」・・・毎年うたわれているコラールに心から感動し、涙の出る思いでした。今後も祈りの輪が力づよく続くように祈ります。　細井 陽子

今夏の酷暑はどこへやら、すっかり涼しくなりました。今、ベテスダの北側にも南側にもトントンと槌音もにぎやかに新築の住宅が出来つつあります。今まで駐車場になっていたところです。大泉学園町という良い名と共に実際に便利なところなのです。バスに乗れば電車の駅に直結し都心に出るにも簡単。近くに大型店舗もあり、日常的に利用しています。本当に感謝です。　真山 知恵子

＊

終戦日うつろふ世にも
忘るまじ
侘しさをまとふが如き
秋の草

秋愁や人の心のうつろひに

秋逝きぬ災害の傷癒えぬまま

蛍草ほのかな明かり胸に沁む

植木 道子

賛助金・献金ありがとうございました

（7～10月分）

太田瑠弥子　明治学院中学校・東村山高等学校　大沼昭彦　日本基督教団鎌倉雪ノ下教会社会委員会　黒川裕子　田中彩子　鈴木祐子　山本洋子　富山紗和子　藤沢ベテル伝道所　今井佳代　坂井賢治・秀子　酒井忍　吉田実生　小玉久美子　浅野康子　日本基督教団・小金教会婦人会　田浦教会内エレミヤ会　野口隆子　森史子　村田充子　牛込払方町教会　山ノ下恭二

（敬称略）

★新しく植木道子の祈りの友になられた方を心から感謝してお知らせいたします。

U　関本郁子姉

〒178-0061　練馬区大泉学園町1-31-5

関本ビル3F　Tel 03-3922-6658

★訃報

長い間桜庭歌子の祈りの友としてお支え下さいました吉田トシ姉が9月20日に、大泉ベテル教会を昨秋退任された森田進牧師が7月27日に召天されました。生前のお交わりを心から感謝し、天父の深い慰めと平安をお祈りいたします。

★理事会報告

第220回理事会　10月6日　於茂呂塾保育園

【報告】

・かにた婦人の村建替えに関わる厚労省訪問について

・日本キリスト教社会事業同盟障がい者研修会の件

【審議】

・かにた婦人の村施設整備積立金取崩の件

・平成30年度第一次補正予算の件

・評議員選任・解任委員会委員交代の件

・定時理事会開催の件

・かにた婦人の村の今後の運営について

――いずれの議案も承認議決された。

★「日々の聖句2019」

来年の「年の聖句」は「平和を尋ね求め、追い求めよ。詩篇34：15」です。

キリスト教書店でなくとも、お近くの書店で、「日キ販」経由とお申込み頂くと入手できます。また、法人本部では、プレゼント用あるいはグループでまとめて10冊以上購入される場合、2割引きにて販売しております。また主日に用いられる「ドイツ聖歌集」はかにた婦人の村へお申し込みください。（0470-22-2280）

★クリスマス献金のお願い

主の大いなる御名を賛美いたします。日々のお祈りの中で弊法人を覚えて、ご支援いただいていることを感謝申し上げます。本年も、「クリスマス賛助金のおねがい」を同封させて頂きます。よろしくお願い申し上げます。

2018年11月15日発行
発行人　大沼　昭彦
編集人　村田　英彦
印刷所　㈱印刷センター
発行所（年3回）
〒178-0061
東京都練馬区大泉学園町7-17-30
社会福祉法人 ベテスダ奉仕女母の家
電話　03-3924-2238
https://www.bethesda-dmh.org/
振替口座00190-2-138164